



Title	シラーの『生理学の哲学』における心身問題：その中間力構想と神経精気論の思想的背景
Author(s)	津田, 保夫
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2004, 4, p. 27-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73814
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シラーの『生理学の哲学』における心身問題 —— その中間力構想と神経精気論の思想的背景 ——

津 田 保 夫

1 はじめに

18世紀半ば頃のドイツにおいて人間学という新しい学問が成立してきたことは、前年度の本共同研究プロジェクトの報告の中すでに述べた。¹もう一度その状況を略述すると、17世紀のデカルト的心身二元論により人間は思惟実体 (res cogitans) としての精神と延長実体 (res extensa) としての身体とに峻別され、前者は哲学や心理学によって、後者は医学や生理学によって、それぞれ別々に扱われるようになっていたが、18世紀中頃になると、人間を精神と身体の交流する総体として捉えようとする動きが起ったのである。

その理論的主導者の一人であったエルンスト・プラトナーは主著『医師と哲学者のための人間学』(1772)において、この新しい学問に対して「人間学」(Anthropologie) という名を与えた。これはいわば従来の哲学と医学を統合するような学問分野であり、それに携わる者は哲学者であると同時に医学者でもあるため「哲学的医師」(philosophischer Arzt) と呼ばれた。この哲学的医師たちによる人間学の研究は幅広い分野に及び、医学や哲学のみならず文学の領域にまで入り込み、プラトナーから直接教えを受けたジャン・パウルをはじめとして、多くの文学者も関わるようになった。カール学院で師のアーベルらから当時の最新の人間学を学んだシラーもその一人である。とくに彼がカール学院の卒業論文として書いた『生理学の哲学』と『人間の動物的本性と精神的本性の連関について』は、精神と身体の相互連関という人間学の核心的問題を扱っている。

人間の精神と身体が相互に交渉しあっていることは、身体が受けた刺激を感覚として精神が感受したり、精神の意志を身体が行動として実現したりすることなどにより、経験的事実として明らかであるが、デカルト的二元論によれば精神と身体はまったく本性を異なる実体であるから、それらが相互に交渉しあっているという事実をうまく説明できないという問題が生じたのである。これがいわゆる心身問題というデカルト的二元論が残した難問であり、この解決の試みとしては、ゲーリンクスやマールブランシュらの機会原因説、ライプニッツの予定調和説などが出されたが、これらはいずれも神の力によって説明しようとするものであった。これに対して18世紀ドイツの人間学は、神のような超自然的力の介在を否定し、精神と身体との間に自然の物理的な力の作用を認めようとする物理的影響説の立場をとり、心身の相互作用が現実にあるという経験的事実を重視して、その原理的

な説明は無益な思弁として斥けたのである。

シラーの受理された卒業論文である『人間の動物的本性と精神的本性の連関について』も、基本的にはそれと同じ傾向のものである。ところがその前年に提出された『生理学の哲学』では、シラーは心身問題の原理的説明という難問に真っ向から取り組み、中間力構想と神経精気論によって自分なりの答えを出そうとした。もちろんこれは、内容が経験科学の領域を超えていくぶん形而上学的なものになってしまったため、医学部の卒業論文としては却下されるのだが、そこには『人間の動物的本性と精神的本性の連関について』では欠落したきわめて興味深い思想が残存しているように思われる所以である。

したがって、この『生理学の哲学』はシラーの思想的発展の過程を知る上できわめて重要な資料なのだが、そこにはいくつかの重大な問題がある。まず、シラーはこの『生理学の哲学』をドイツ語とラテン語で書いたのだが、残存しているのはドイツ語で書かれたものの全5章のうち第1節の一部のみであり、しかもそれはシラー自身の手によるものではなく、他人が書き写したものである。したがって、そこから『生理学の哲学』の全体像を再構成するのはきわめて困難であろう。また、その中心概念をなす中間力や神経精気の理論は、その後のシラーの著作の中ではまったく現れず、それ以降放棄されてしまったかのように見える。しかし、たとえば『美的教育書簡』における遊戯衝動などには明らかに中間力構想との関連を見て取ることもできるのであり、その基本的な考え方はその後のシラーの思想の中でも生き続けていると考えられるのである。そして、そのようなシラーの思考原理のいくつかは、『生理学の哲学』のわずかに残存している部分にも十分に現れているように思われる。

そこで本稿では、シラーの『生理学の哲学』で扱われている心身問題に対するシラーの考え方を、とくに中間力構想と神経精気論を中心に、同時代の思想的背景との関連において考察したいと思う。そして、神経精気については当時の医学界の権威であったハラーの影響がすでに指摘されているが、人体を目に見えない微細な精気が流れているという考え方にはもっと古くから存在しているのである。次章ではそのような心身問題と精気説の系譜を歴史的にたどり、その思想史的背景との関連においてシラーの生理学思想の特質を明らかにしたい。

2 心身問題と精気説の歴史的系譜

人間を魂と身体の結合として捉える考え方は古くから存在している。すでに古代ギリシア時代のプラトンは、人間の魂は不死で身体は死すべきものであるが、現世に生きる人間においてその両者は分かちがたく結びついていると考えた。プラトン哲学では魂にとって身体は牢獄なのであり、身体の死によってようやく不死の魂は身体から解き放たれるのである。そしてプラトンは『国家』において魂を知性と気概と欲望の三つの部分に分けているのであるが、『ティマイオス』ではさらにそれぞれの部分に対して身体における存在場所を割

り当て、知性は頭部、気概は胸部、欲望は腹部に住むと考えたのである。²

一方、アリストテレスもまた人間の魂と身体は不可分だとしたが、プラトンのように魂に対して身体を否定的に捉えるのではなく、魂を形相として身体をそれに対する質料であるとみなした。³ 魂と身体はそのようにして互いに必要としあっているのである。また彼は魂を五つの能力、すなわち、栄養的能力、感覚的能力、欲求的能力、運動可能的能力、思考的能力に区分した。⁴ このうち、植物は栄養的能力のみを持ち、動物はそれに加えて感覚的能力と欲求的能力および運動可能的能力を持つが、人間だけがさらに思考的能力も持つ。そして、有血動物においては感覚的能力と栄養的能力の場所は心臓にあると主張するのである。⁵ さらにアリストテレスは、すべての生きた動物はその身体の全体に本性的な熱（いわゆる内在熱）を持っていると考え、その熱の源泉も心臓であるとした。⁶ 彼によればこの熱こそが生命の本源であり、その消滅が死なのである。

その後、生理学の父とも呼ばれるエラシストラトスは、精気説の考え方を初めて生理学に取り入れて体系的に論じた。彼は人体のすべての器官に静脈、動脈、神経という三つの導管がゆきわたり、人体はそれらの導管を通る血液と二種類の精気（プネウマ）によって養われていると考える。⁷ つまり血液は静脈によって運ばれ、プネウマは動脈と神経によって運ばれるのだが、肺で取り込まれた空気がプネウマの原料となり心臓で「生命精気（生命のプネウマ）」（pneuma zōtikon, spiritus vitalis）が作られ、動脈で体内に送られる。これが脳へ達すると「靈魂精気（心のプネウマ）」（pneuma psychikon, spiritus animalis）となり、神経によって体の方々へ運ばれるのである。⁸ そして、血液が過多になって動脈に入り込みプネウマの流れを妨げることによって、様々な病の症状が現れるという血液過多病因論を唱えた。⁹

これらの考え方を受け継ぎながらも、とくにエラシストラトスの精気説を批判的に修正して生理学の体系を集大成したのが、ペルガモンのガレノスである。エラシストラトスが動脈には血液ではなくプネウマだけが流れていると考えたのに対し、¹⁰ ガレノスは動脈にも血液が存在すると主張する。そして病気の原因は血液過多ではなく血液中の栄養の残滓（不淨物）によるものだとする栄養残滓病因論を唱えた。¹¹ なお彼は動脈内のプネウマは血液の中に含まれているとし、それが脳内に達すると血液と混じらない純粋な靈魂精気が発生し、これが神経に沿って運ばれて、身体の高次の諸機能を営むと考えたのである。¹²

ガレノスはまた合目的性を持つ身体の生理機能を魂の統御力の表れと見なして、アリストテレスの運動概念とプラトンの魂の三区分説を踏襲し、さらにエラシストラトスの精気説をも取り入れて、魂による身体の統御機構について論じるのである。つまり、身体の運動は随意運動および知覚、不随意運動、栄養運動の三種類に分けられ、それぞれを統御する魂の部分として理性、欲望および自然力が割り当てられる。¹³ これらの身体における場所はそれぞれ脳と心臓と肝臓であるが、彼はこれら三つの臓器がその魂の機能を伝達し実現するための精気を持つと考え、エラシストラトスの二つのプネウマに「自然精気（自然のプネウマ）」（pneuma physicon, spiritus naturalis）を加え、肝臓での自然精気、心臓で

の生命精気、脳での靈魂精気という三つのプネウマによる転換系を構築したのである。¹⁴ そしてそれらの精気が担う魂の機能を具現するものとして、自然の諸力（自然生命力）が身体各部にその目的に応じて配分されていると考えた。¹⁵ このようにしてガレノスの生理学体系では魂と身体は密接に関連し一体となって生命を形成しているのであり、それ以降近代にいたるまで、医学や生理学の古典的規範としての地位を保ち続けたのである。

しかしすでに述べたように、17世紀に入るとデカルトの心身二元論によって、人間の魂と身体はまったく異なる実体として峻別されてしまう。デカルトは「我思う」思惟実体としての精神の明証性から出発し、演繹的に推論して物心分離の二元論に到達した。つまり魂（精神）は空間に延長を占めない思惟のみを本性とする单一の実体であり、身体なしにても存在しうる。また身体（物体）は魂と関わりなく空間に延長を占めることによってのみ存在しうる合成された実体である。このようにして魂はまったく非物质的な存在となり、その不死性の証明の前提が得られ、一方身体は延長のみを本性とするたんなる物質として一切の靈的性質が排除され、物理的力学法則によって機械論的に説明しうるようになる。実際、デカルトは思惟する精神を持たない動物を一種の自働機械とみなしたし、また精神を持っている人間についても、身体部分は心臓の熱機関を中心とする精巧な自働機械だと考えた。そのメカニズムを彼は『人間論』で、同時代にハーヴェイによって発見された血液循環の理論とともに、ガレノスから続く精気論を用いて説明するである。ただし、デカルトが用いているのはガレノスの三つの精気のうち靈魂精気（pneuma psychikon）に相当する動物精気（esprit animaux）のみであり、生命精気と自然精気の機能は血液に割り与えられていると考えられる。¹⁶

『人間論』において動物精気は血液と並んで重要な要素として扱われているのだが、それは「血液の最も微細な粒子」からなる「一種のきわめて微細な風」もしくは「きわめて活発で純粋な炎」のようなものであり、動脈を通って脳に上がってきた血液が脳の松果腺で濾過されることによって作られる。¹⁷ つまり、デカルトのいう動物精気はもともとは血液なのだが、血液の微細な粒子が「より粗大な粒子から分離」され、「心臓の熱によって与えられた極度の速さを保持している」ことで、一般の血液の性質を失うので、動物精気という別の名で呼ばれるのである。¹⁸ 脳内で作られた動物精気は脳の空室から脳実質の孔を通って神経に入っていくのだが、この動物精気の量の多少やその傾向に応じて、「これらの神経が挿入されている筋肉の形を変え、またこの手段によって全肢体を動かす力をもつ」という。¹⁹ このようにして身体各部の動きは動物精気によって調整されるのだが、また逆に、動物精気は身体各部の状態や感覚を脳に伝える役割も果たすのである。²⁰ そしてそのために、動物精気を通して脳に伝えられた身体の感覚や状態は精神に様々な感情（情念）を引き起こすのであり、この問題は『人間論』の続編ともいえる『情念論』で詳しく論じられることになる。

『情念論』のテーマである情念（passion）とは、身体を能動者として精神が受ける受動（passion）としての意識、つまり「精神の知覚、感覚または感動であって、特に精神自身

に關係づけられ、かつ精氣のある運動によってひき起こされ維持され強められるところのもの」²¹ である。この情念には様々なものがあるのだが、デカルトは基本的な情念として、「驚き」、「愛」、「憎み」、「欲望」、「喜び」、「悲しみ」の六つを挙げている。²² このような身体からの精神の受動としての情念の存在は、精神と身体が何らかの形で結合していることを前提とするが、デカルトの精神は單一不可分であるから、プラトンやガレノスの魂の三分説のように魂をいくつかの部分に分けて、それぞれに身体の各部を割り当てるということはできず、精神と身体は一力所のみで結合していると考える。その場所、すなわち身体における魂の座は、動物精氣が精製される脳の松果腺である。この松果腺で精神は身体からの動物精氣の運動によって情念を受ける。そしてまた逆に、精神には能動として意志作用もあるのであり、これもまた松果腺で運動精氣に働きかけて身体の運動を起こすこともできるのである。しかし、松果腺における精神の受動としての情念と能動としての自由意志とが相反して互いに争う場合があるのであり、そのときには精神が情念を支配することが必要となる。こうしてデカルトの情念論は道徳論へとつながるのである。

以上のようにデカルトは、脳の松果腺における動物精氣の運動によって精神と身体の相互作用を説明したのだが、思惟実体として延長をもたない精神が延長をもつ物質としての松果腺において、同じく延長をもつ物質である動物精氣とどのように作用しあっているのか、ということについては明快な答えを出していない。そしてこのことは、初めに述べたように、心身問題として議論を引き起こすとともに、心身二元論の首尾一貫性をも揺るがす結果にもなった。その結果、身体を精神に還元する唯心論（シュタールなど）や精神を身体に還元する唯物論（ラ・メトリなど）といった極端な一元論も現れてくるようになつたのである。しかし一方でまた、哲学と医学はその対象をそれぞれ精神および身体に限定することによって、学問として確立発展することにもなった。医学の分野ではオランダのブルハーフェが近代臨床医学の基礎を築き、その一番弟子であったアルブレヒト・フォン・ハラーは神経のはたらきに重点を置いた生理学体系を作り上げた。そのさいに彼はガレノスからデカルトへと続いた精氣論を取り入れているのだが、神経を動く精氣に対して神経液（Nervensaft）という概念を用い、それを神経精氣（Nervengeister）とも言い換えているのである。²³

ハラーは身体の運動と感覚的受感は神経を介して行われると考え、神経の起点となる脳髄に魂の座があると見なした。²⁴ しかし神経自体は纖維質であるから、脳から出て神経を通り素早く流れるような物質が存在しなければならないと考え、それを神経液と呼んだのである。²⁵ 彼は「この液の性質は未知である」²⁶ と述べているが、それは脳の動脈から来ており、顕微鏡でも見ることのできないような神経の微細な導管を通っていくものだと推測している。²⁷ またこの神経液は「感受と運動の道具」²⁸ であるから、きわめて流動的で感覚の印象や意志の命令を遅滞なく伝達できなければならず、目に見えないほど微細で、他の体液とは区別されなければならないとしている。²⁹

人間学の提唱者であるエルンスト・プラトナーもそのような考えを継承した。彼は神経

を流れる物質を神経液もしくは生命精氣 (Lebensgeister) と呼び、人間の精神や身体の活動、また天才や病なども、神経液あるいは生命精氣の運動と関連させて説明している。³⁰ しかし、ハラーもプラトナーも精神が神経液をどのようにして動かすのか、あるいは神経液はどのようにして精神に働きかけるのかといった問題には立ち入らず、彼らはそれをただ経験的事実として受け入れて、具体的な事象の記述のみに留まるのであり、デカルトが残した心身問題は解決されずにむしろ回避されている。それに対して、シラーの『生理学の哲学』はそのような精氣論の流れを継承しつつも、デカルトが残した心身問題に取り組んでいるのであり、次章ではシラーのその試みを検討してみたいと思う。

3 『生理学の哲学』における中間力構想と神経精氣論

1) 中間力による力学的説明

シラーの『生理学の哲学』の全体構成は、「精神的生活」、「栄養的生活」、「生殖」、「これら三体系の関連」、「睡眠と自然死」という 5 章から成り立っているが、残存しているのはこのうち第 1 章「精神的生活」の第 11 節途中までである。そこでは感覚的感知や表象、思考など人間の精神のはたらきが身体との関連において考察されているのだが、その最初に扱われているのは「人間の使命」 (die Bestimmung des Menschen) の問題である。「人間の使命」というのは、1748 年に出版されたシュバルディングによる同名の書物によって、すでに当時のドイツの啓蒙主義者たちの間に広まっていたテーマであった。³¹

この問題に関してシラーはまず、「宇宙は永遠なる知性の作品であり、見事な計画にしたがって構想されている」³² と述べ、人間の精神はその「偉大なる計画のすべてを発見し、その計画から創造主を認め、愛し、讃えなければならない」 (S.37) とする。したがって、「人間はその創造主の偉大さを求めて努力し、創造主が世界を捉えるのと同じ眼差しで世界を捉えるために存在する」 (ebd.) のであり、その意味において「神と等しくなること (Gottgleichheit) が人間の使命なのだ」 (ebd.) と答えるのである。そして、「この理想は無限だが、精神は永遠だ。永遠は無限の尺度である。すなわち、精神は永遠に成長を続けるが、その理想へは永遠に到達することはないだろう」 (S.38) という。つまり、人間の使命は神の完全性に到達することなのだが、それは永遠に努力されるべき課題なのであり、そのためには魂の不死が前提とされるのである。このようにシラーは、人間の使命の問題から形而上学的に魂の不死を導き出したのだが、魂がその使命を果たすためには、神が創造した世界を感受する必要がある。そこから、この物質的世界を非物質的な魂がどのようにして感受するのかというデカルト以来の心身問題へと移るのである。

そしてまず次の第 2 節では物質から精神への作用が論じられる。魂の外部つまり物質世界での作用はすべて物質の運動であるが、これは物質の「不可入性」 (Undurchdringlichkeit) という性質に基づいている。不可入性というのは、延長実体である物質が空間内に占める延長部分には他の物質は入り込むことができない

(undurchdringlich) という性質であり、この性質によって物質どうしは互いに作用することができるわけである。一方、空間内に延長をもたない精神は不可入的ではないので、物質は精神に対して作用することができないはずなのだが、実際には物質と精神の間での相互作用は起こっている。そこでシラーは、このようなデカルト的物心二元論がもたらした矛盾を説明する諸説を一つづつ検討していくのである。

まず彼は、「精神は物質であることなく、不可入でありえなければならない」(S.40) という考え方を挙げる。これはシラーの師アーベルが提示したテーゼだが、³³ シラーは物質の概念を不可入性と切り離すことはできないと主張するのである。かといって、「さもなくば精神自体が物質でなければならない」(ebd.) という唯物論の考え方には、人間の使命の前提となる魂の不死と矛盾しており、とうてい受け入れられるものではない。そのような説は「愚か者や悪人だけを魅了し、賢者はそんなものは嘲笑する」(ebd.) のである。次に、「世界についての我々のすべての表象は我々の自我のみから紡ぎ出された織物である」(ebd.) とする考え方には、世界と我々との完全な分離独立を前提としており、そこから主張される予定調和説を認めるならば、「世界は意図なく存在することになり、自由も道徳的は認も幻想にすぎない」(ebd.) ものになる。また、「我々に作用する力を物質に与えたのは全能の神の直接的影響である」(ebd.) とする機会原因説をとるならば、「私の表象はどれも奇跡ということになり、第一の自然法則に反する」(ebd.) ことになるのであり、また「奇跡は世界の計画における欠陥を露呈する」(ebd.) ことになるのである。

このようにしてシラーは、精神の不可入性説（アーベル）、唯物論（ラ・メトリなど）、予定調和説（ライプニッツ）、機会原因説（マールブランシュ、ゲーリングス）といった従来の諸説をすべて拒絶した後で、彼独自の考え方を提示する。それは、精神と物質を媒介する第三のものを想定するというものである。「そして最後に、さもなくば精神と物質の間にあって両者を結びつけるような、一つの力が存在しなければならない。それは物質によって変化させられ、精神を変化しうるような、一つの力である。それゆえこれは、一部は物質的で一部は精神的であるような力、一部は可入的で一部は不可入的であるような存在、ということになろう。」(S.40f) シラーはこれを「中間力」(Mittelkraft) と名付けるのである。

だがこのような物質的であると同時に精神的でもあるような力の存在は、物心二元論の立場からは想像しがたいものであろう。シラー自身も第3節の中間力に関する説明の中で、「中間力の存在は考えがたいということは喜んで認めよう」(S.41) と述べている。その理由を彼は、精神や物質の作用は直接あるいは間接に感じ取ることができるが、中間力はそれらの媒介物に過ぎないため、それ自体を感じ取ることができないと主張するのである。しかし、だからといって中間力が存在しないということにはならないと主張するのである。彼にとって中間力が実際に存在するということは、経験的事実であった。「経験がそれを証明している。理論がどうしてそれを拒絶できようか。」(S.42)

精神と物質との間ではたらく中間力は、物質間でのみはたらく通常の機械的力とは異なる

る性質のものであるから、シラーは続く第 4 節で中間力と機械的な力との関係について説明する。機械的力には様々な種類があり、それぞれ別々の法則に従っていて、中間力に対してもそれぞれ異なった方向を持っているわけだが、シラーはそのような機械的力のうち、世界と中間力との間に置かれる機械的力を「機械的下部力」(mechanische Unterkräfte) と名付ける (ebd.)。しかしこの機械的下部力や中間力は外部の力の破壊的な影響や対象の過剰につねに曝されているので、それを守るための力が存在し、それが「防護力」(Schützkräfte) と呼ばれるものである (ebd.)。そしてこれらすべての機械的下部力と防護力を結び合わせたものが「組織」(Bau) であり、この構造と中間力を結び合わせたものが「器官」(Organ) である (ebd.)。そして力は異なるが組織が異なることによって、異なる種類の器官が存在する。外界の対象の変化はこれらの器官において組織と中間力を経て魂に到達し、「表象」(Vorstellung) が生じるのである (ebd.)。この表象の作業全体が「感覚」(Sensorium) であり、組織における変化は「方向」(Richtung) と呼ばれ、中間力における変化は「物質的觀念」(materielle Idee) と呼ばれる。そして、それらに誘発された精神の変化が、もっとも厳密な意味での「觀念」(Idee) と呼ばれるものだとがあるのである (S.43)。

2) 神経精気論による生理学的説明

以上のようにシラーはまず、物質から精神への作用の過程を中間力という概念を用いて、他の機械的諸力と関連させながら、いわば力学的に説明したわけだが、第 5 節での表象器官の分類の説明を挟んだあと、第 6 章では生理学的説明へと転じる。そこで用いられるのが、すでにハラーによって当時の医学界に広まっていた神経医学の理論である。

シラーは中間力を神経と結びつけて次のように述べる。「私自身は幾千もの懷疑を経て、次のことをはっきりと確信するに至った。すなわち、中間力は限りなく微細で単純で流動的なものの中に住んでいて、それは神経の中の導管を流れている。それは元素的な火ではなく、光やエーテルでもなく、電気のあるいは磁力的物質でもないのであり、神経精気(Nervengeist) と私はそれを名付ける。そして今後は中間力のことをそう呼ぶことにしよう。」(S.44) ここで述べられている神経精気の性質は、ハラーのいう神経液、あるいはプラトナーのいう生命精気とほぼ同じであり、シラーはそのような当時の神経医学で認められていた神経精気論を取り入れて、それを自分の中間力の概念と同一視するのである。つまり力学的機能としてみれば中間力であり、生理学的機能としてみれば神経精気ということになるのだろう。したがってそのあと生理学的説明においては、中間力は神経精気と呼ばれることになる。

シラーによれば、この神経精気はどの器官においても同じ種類であり、器官によって異なるのはその組織内で与えられる「方向」であるという (ebd.)。「方向」とは、中間力に関する説明では対象の「組織における変化」のことであったが、第 7 節でシラーは各感覚器官での対象の感覚感受における方向の相違を、「機械的下部力」や「防護力」の概念をも用

いながら具体的に説明する。たとえば眼という感覚器官における視覚の場合を例に取ると、対象物の表面の光の振動はまず眼の下部力によって神経精氣に伝えられる。これは眼の湿润性 (Feuchtigkeiten) によって起こるのであり、この潤湿性を規定し維持する力は「助力」 (Hilfskräfte) と呼ばれ、眼の場合これに相当するのは薄膜である。そして「防護力」となるのは瞼、眉、睫、涙などである (S.45)。このように、力の概念はそれに相当する身体各部位に置き換えられて、生理学的に説明されるのである。

こうして外界の対象は感覚器官において神経精氣まで達するのだが、それに引き続いで第 8 節では、神経精氣から精神における過程が説明される。まず、外界の対象の変化は神経精氣を経て魂に同様の変化を引き起こし、これによって生じるのが「表象」 (Vorstellung) である。しかし「この表象は悟性が活動し創造するための素材に過ぎない」 (S.47) ので、「この提供された感覚的素材における悟性の活動、すなわち思惟 (Denken) が第二の主要な作業となる」 (ebd.) のである。ところが、このような表象は感覚のさいの神経精氣の感覚的変化によって誘発されたもので、それはすぐに消失してしまうものであるから、「この神経精氣の感覚的変化を引き留め、持続させるような新しい中間力が存在しなければならなかつた」 (S.48)。それは「感覚でも魂でもない、新しい器官」 (ebd.) であり、「普遍的感覚」 (allgemeine Sensation) と呼ばれるものだが、シラーはそれを「思惟器官」 (Denkorgan) と名付けるのである (ebd.)。これが悟性の活動である思惟の道具となるのであり、シラーはそれを「想像」 (Phantasie) とも言い換えている。

そして「この思惟器官あるいは想像の物質的観念は何であり、それはどのようにして感覚の物質的観念から産み出されるのか」 (ebd.) という問題を提起し、それに対する従来の諸説を三つ挙げる。それは「神経精氣の圧迫によって引き起こされた、神経精氣の導管である神経における印象」 (ebd.) であるとする説と、「感覚的精氣における本源的運動と調和した神経精氣の運動」 (S.50) であるとする説、そして「全体で関連して思惟器官をなしている、ぴんと張られた弦楽器の弦の振動」 (ebd.) だとする説の三つであるが、³⁴ シラーはまたこれらをすべて否定する。そして彼はこの問題を第 9 説で「連想」 (Assoziation) によって説明しようとするのである。つまり、感覚の物質的観念は連想作用によって、記憶の中に眠っている観念の中から類似する想像の物質的観念を呼び起こすわけである。したがつて、「物質的連想は思惟が成り立つ根拠である。想像する悟性の指導原理である。これによってのみ悟性は観念を結合し、区分し、比較し、推論し、意志を欲求にしたり拒絶したりすることができる。」 (S.55)

だが、このように悟性や思惟が物質的なものからの作用によってのみ規定されるとするならば、人間の意志の自由が存在しなくなりはしないだろうか。そこでシラーは、魂の側からも思惟器官に対して能動的な作用があることを示そうとする。それが第 10 節のテーマであり、その仕事をする役割は「注意力」 (Aufmerksamkeit) に与えられている。こうして人間の魂の能動的作用の説明に移るのだが、第 11 節で魂自体の感情の問題を論じ始めたところで、『生理学の哲学』の残存部分は途切れるのである。

それ以降の失われた部分に何が書かれていたのかは今となっては推測するしかないが、第9節までは主として外界の物質から魂への作用が論じられ、第10節から魂の能動的な作用に移っているので、おそらくこの続きでは魂から外界への作用や意志行為などの問題が扱われていたのではないかと思われる。そして第2章「栄養的生活」以降でも、たんなる身体の生理学的説明ではなく、精神から身体の生理的活動への作用など、心身の相互連関という観点から論述されていたであろうと考えられるのである。

このように、シラーの『生理学の哲学』のわずかながらも残存する部分を通観してみると、シラーは人間を精神と身体の連関する統合体として捉え、それを哲学的に論じるとともに生理学的にも論じることによって、生理学と哲学を統合しようとしていたことが感じられる。しかし、その中心となっている中間力構想と神経精気論によってデカルト以来の難問である心身問題を解消しようとする試みは、結局のところ中間力と神経精気という新しい謎を残しただけに終わってしまったように思われる。つまり、デカルトの動物精気はあきらかに物質であったし、ハラーの神經理論は生理学的領域にのみ限定されていたが、シラーの神経精気や中間力は精神と物質のいずれでもないような性格を帯びてしまったのである、それがどのようにして精神と物質を媒介しているのかは解明されないままなのである。その意味で、シラーの試みは生理学の側からも哲学の側からも不徹底に終わってしまっているのであり、そこに方法論的限界あるいはこの問題自体の限界があったともいえるのではないだろうか。

4 その後のシラーにおける心身問題

『生理学の哲学』は結局のところ卒業論文としては却下された。その理由としては、内容が大胆で思弁的に過ぎることや医学界の権威を批判したことなどが挙げられるが、いずれにせよ翌年シラーは、『人間の動物的本性と精神的本性の連関について』という新たな卒業論文を提出して受理されることになる。これも同じく人間の身体と精神の連関の問題を扱っているものであるが、ここでは中間力理論も精神精気論も用いられず、人間の使命をめぐる形而上学的議論も行われず、具体的な事象の観察と記述が中心となっている。

また、『生理学の哲学』の冒頭で行われた人間の使命に関する問題は、後に『哲学的書簡』に付けられた『ユーリウスの神智学』で、より詳細に論じられている。しかしそれは『哲学的書簡』全体の枠組みの中では、若き熱狂の産物としていささか否定的なニュアンスが与えられているのである。そしてそこではむしろ、熱狂の結果として生じたメランコリーという心身の不調和状態の治癒が問題となっている。

中間力構想に見られるような、対立する二つのものを媒介する第三のものを設定する考え方には、さらに後の『美的教育書簡』における遊戯衝動などにもつながっているといえよう。しかしこれもまたシラーにとっては、心身の調和を喪失した現代人に調和を回復させるための教育という観点から用いられている。

人間の心身の連関という問題は、『生理学の哲学』以降もシラーにとって主要な関心事であった。しかしその後のシラーの関心は心身問題の思弁的な解明ではなく、具体的な人間の心身相関あるいは心身不調和といった現象に向けられるようになっていったように思われる。『生理学の哲学』はそのような意味において、人間学者シラーが通過した一つの道標だったということができるだろう。

-
- 1 津田保夫「エルンスト・プラトナーの『医師と哲学者のための人間学』－後期啓蒙主義における新しい人間観とその学問の試み－」（大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト2002 ドイツ啓蒙主義研究3』平成15年 S.1-16）
 - 2 プラトン（種山恭子訳）「ティマイオス」（『プラトン全集12』（昭和50年 岩波書店） S.126ff.
 - 3 アリストテレス（山本光雄訳）「靈魂論」（『アリストテレス全集6』昭和43年 岩波書店）S.38ff. 参照。
 - 4 Ebd. S.46f.
 - 5 アリストテレス（副島民雄訳）「青年と老人について、生と死について」（『アリストテレス全集6』昭和43年 岩波書店）S.290ff. 参照。
 - 6 Ebd. S.292f.
 - 7 梶田昭『医学の歴史』（平成15年 講談社）S.77f.
 - 8 Ebd. S.78.
 - 9 二宮陸雄『ガレノス 精魂の解剖学』（平成5年 平河出版社）S.9f.
 - 10 なお、動脈と静脈の違いを発見し、静脈には血液が流れ、動脈には精気が流れていることを最初に主張したのは、ディオクレス門下でその学派の継承者であるプラクサゴラスだとされている。これについてには、ebd. S.90 参照。エラシストラトスはこのプラクサゴラスの考え方を継承しているのである。
 - 11 Ebd. S.546ff.
 - 12 Ebd. S.444f.
 - 13 Ebd. S.19f.
 - 14 Ebd. S.326.
 - 15 二宮陸雄『ガレノス 自然生命力』（平成10年 平河出版社）S.392. なお、ガレノスはそのような自然力として、引き寄せ力、留保力、駆出（排出）力、変質力の四つを挙げ、これらが身体各部に存在することを論じている。これについては、Ebd. S.277ff. および S.332 参照。
 - 16 いずれもラテン語では *spiritus animalis* であるが、デカルトの動物精気はガレノスの靈魂精気に相当するとはいえたまく同一とは言えず、またデカルトの場合は「動物精気」の訳語が定着しているので、ここでは動物精気の訳語を用いた。
 - 17 デカルト（伊東俊太郎・塩川徹也共訳）「人間論」（『デカルト著作集4』昭和48年 白水社） S.231.
 - 18 Ebd. S.232.
 - 19 Ebd.
 - 20 Ebd. S.242ff.
 - 21 デカルト（野田又夫訳）「情念論」（『世界の名著 デカルト』昭和53年 中央公論社） S.427.
 - 22 Ebd. S.447.
 - 23 Haller, Albrecht von: *Grundriß der Physiologie für Vorlesungen. Nach der vierten latinischen Ausgabe. Übersetzt von Konrad Friedrich Uden.* 1784. S.300f. なお、このラテン語のオリジナル版である *Primae linea physiologiae* は1747年に出版されている。
 - 24 Ebd. S.296ff.
 - 25 Ebd. S.300.
 - 26 Ebd. S.301.
 - 27 Ebd.
 - 28 Ebd. S.303.
 - 29 Ebd.
 - 30 プラトナーの理論については、拙稿（註1）参照。
 - 31 シュバルディングと当時の「人間の使命」の問題の扱われ方については、2001年度の本研究プロジェクト報告における拙稿「ドイツ啓蒙主義における『人間の使命』の問題－シュバルディングの『人間の使命』とその影響－」（大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト2001 ドイツ啓蒙主義研究2』平成14年 S.11-24）参照。
 - 32 Schiller, Friedrich: *Philosophie der Physiologie.* In: *Schillers Werke und Briefe.* Bd.8. Frankfurt

a.M. S.37. 以下、『生理学の哲学』のテキストからの引用等はこの版から行い、括弧内にページ数を記載する。

33 アーベルによる魂の不可入性説については、Riedel, Wolfgang: *Die Anthropologie des jungen Schiller. Zur Ideengeschichte der medizinischen Schriften und der »Philosophischen Briefe«*. Würzburg 1985. S.91ff. 参照。

34 なお、このうち最初のものはハラーの説であり、二番目のはシラーの師アーベルあるいはフランスの医師ル・カ (le Cat, Claude-Nicolas) の説だとされる。それについては、Ebd. S.1155 および、Alt, Peter-André: *Schiller. Leben – Werk – Zeit. Eine Biographie*. Bd.1. München 200. S.162 参照。